

称号及び氏名 博士（言語文化学） 案野 香子

学位授与の日付 平成 29 年 3 月 31 日

論文名 「現代日本語の反語表現についての研究」

論文審査委員 主査 西尾 純二

副査 山東 功

副査 高垣 由美

## 論文要旨

本論文の題目は「現代日本語の反語表現についての研究」である。国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』及び漫画、小説などの実例をもとに、反語表現の特徴を体系的に記述した。

本研究では、反語表現を「疑問文の形式をとり、問いかけの機能を持ちながらも、話し手は質問に対する答えをすでに知っており、もとの命題とは逆の否定的事態を聞き手に強く主張する、あるいは想起させるもの」と定義した。

この定義のもと、反語表現を形態ごとに、専用形式を用いた反語文、疑問語疑問文形式の反語文、肯否疑問文形式の反語文の 3 種類に分類した。専用形式を用いた反語文の「専用形式」とは、文末の「(て) たまるか」「ものか」「(て) たまるものか」のことで、この文は疑問文と混同されないという特徴がある。疑問語疑問文形式の反語文では、現れる疑問語によって反語文の性質が異なっていた。また、肯否疑問文形式の反語文については、「か」で終わる有標の反語文に限ったが、疑問文との区別の要因が主な問題となった。

本論文では、反語文について構文レベル、意味レベル、談話レベル、語用レベルの側面から議論を行ったが、反語文の性質が形態や、文に現れる疑問語で異なるため、議論のレベルもその反語文の特徴に特化したものとなった。

本論文は次のような構成になっている。

第 1 章では、研究の対象・目的・方法を述べた。

第 2 章では、先行研究と本論文の立場を述べた。

第 3 章では、反語文と疑問文は形態的に類似しているため、両者を区別する条件を整

理した。①イントネーション、②文脈の支え、③語句による反語化、④構文の定型性、⑤疑問語の実質化の困難さ、⑥先行文脈と当該発話内容との妥当性をあげた。

第4章では、専用形式を用いた反語文、第5章では、疑問語疑問文形式の反語文、第6章では、肯否疑問文形式の反語文について、それぞれ分析を行い、特徴を述べた。

第7章では結論、本研究における関連分野に対する意義と貢献、及び今後の課題を述べ、本論文のまとめとした。

以下、専用形式を用いた反語文、疑問語疑問文形式の反語文、肯否疑問文形式の反語文の全体像を述べる。

専用形式を用いた反語文とは、専用形式「(て) たまるか」「ものか」「(て) たまるものか」を文末にもち、疑問文との解釈の混同がなく、その文では反語文にしか解釈されない文である。例えば、「キョロキョロしながら歩く奴があるか」といった「<連体修飾節+ヒト名詞>+があるか」文も同様に反語文にしか解釈できない。

「たまるか」文は、心理的に不快だが抵抗可能な事態に対して、迷惑を阻止する、あるいは拒否する意味合いを有し、話し手が積極的に望んでおらず、求めていることを表す。「ものか」文は、動詞に接続した場合、「意志動詞辞書形を述語にもつ命題+ものか」は「話し手の強い否定的意志」を、「無意志動詞辞書形を述語にもつ命題+ものか」は「話し手の強い否定的確信」を表す。「たまるものか」文は、意味的には、話し手の強い拒否、拒絶の意思表示がある。「<連体修飾節+ヒト名詞>+があるか」文は、目の前の人物を責めたり、叱責したりするときに用いられる。

疑問語疑問文形式の反語文は、「誰」「どこ」「何」「どうして」といった疑問語によって成り立ち、全量否定、つまり、「誰も/どこも/何も/どうしても～ない」という解釈ができる。「何に」は「何になる」、「どこに」は「どこに<存在動詞>」のように述語が限定されてしまうため、本論文では、主格成分として用いられる「誰が」「どこが」「何が」及び「どうして」を対象に研究を行った。

疑問語疑問文形式の反語文は、通常疑問語疑問文と形態的に類似しているために、それぞれの疑問語による反語文について、反語文と疑問文がいかにして区別されるかを考察した。どの疑問語疑問形式文の反語文においても共通して言えるのは、疑問語というのは、内容が不明、不定の不定語である。その疑問語がいわば空欄で、話し手が不明部分の明確化を聞き手に求めていくのが疑問文で、不明部分である空欄を明確にしようとしても事態が成り立たないのが反語文であるということである。

まず、反語の「誰が」文の特徴について述べる。

「誰が」文は構文レベルでは、文の述語が可能動詞の場合、疑いのモダリティが多く見られることが明らかである。このことから、「人」の能力や可能性に疑いを持ち、全否定する働きがあることを指摘した。また「誰が」文は、目的語の連体修飾概念の蓋然性が著しく低い、あるいは高いために、誰も受け入れられない、誰もそのことを実現できそうにないという意味が生じることを明らかにした。意味レベルの議論では、「誰が」

文は「お前がやらなくて」「ほかに」といった否定的条件節や否定的概念を想起させる表現が、話し手が意図する人物を「限定」することにつながることを明らかにした。

次に、反語の「どこが」文の特徴について述べる。

構文レベルの考察では、形容詞述語文、名詞述語文を構成することがほとんどで、動詞述語文は意味的に形容詞性を持っている動詞しか現れないことを指摘した。意味レベルの考察では、「どこが<名詞>だ」構文では、話し手がプラスの期待感やマイナスの期待感をもち、それらが裏切られたと感じた際に、「呆れ、とまどい」の感情を表す効果を持つことを指摘した。一方、「<名詞<sub>1</sub>>のどこが<名詞<sub>2</sub>>だ」構文になると、「名詞<sub>1</sub>≠名詞<sub>2</sub>」の意味になり、話し手の不快感や怒りといった感情を表現する効果を持つことを論じた。談話レベルの考察では、先行文脈の語句を引用したり、他の言葉で言い換えたり、その語句から連想される他の語句に置き換えたりする事例を扱った。言い換え、連想は話し手の言葉に置き換えるわけであるから、話し手の主観の介入がある。

次に、反語の「何が」文の特徴について述べる。

構文レベルの考察では、「<ヒト名詞>に何ができる／わかる」という構文をとりあげ、能力主体を二格表示することで、反語解釈される原因について検証した。「<ヒト名詞>に」には「<ヒト名詞>は」と違って、対比性がないため比較対象がなく、「何ができる」「何がわかる」も不定性は依然として明確化されないままの状態であり、その結果この構文は、反語解釈されるとした。意味レベルの考察では、「何が<名詞>だ」という構文の<名詞>には、一般名詞だけでなく、台詞、文相当語句というように幅広い範囲で語句が入るところが「どこが<名詞>だ」と異なる点であることを明らかにした。また、「引用」を行う際にも、「何が<名詞>だ」は相手の口調まで引用つまり口真似し、その発話を否定するところが特徴的である。更に「何が<名詞>だ」は話し手の対象に対する「呆れ」「無意味」「不審」を表すことも述べた。談話レベルの考察では、「何が<感情形容詞>」の構文のときには、<感情形容詞>には「おかしい」が慣用的に入り、相手が笑っている様子を受けて、すかさず黙らせるために発する表現であることを明らかにした。語用レベルの考察では、「誰が」文、「どこが」文とは異なり、「何が」一文で、聞き手の既有知識による反語解釈を表すことはできないことを述べた。

反語の「どうして」文についても考察を行った。構文レベルの考察では、文末が可能動詞、疑いのモダリティ形式で構成されており、可能性に疑いをもつ文意となることを述べた。普通体の文末に対して丁寧体の文末もあり、後者は一見聞き手目当てのようではあるが、聞き手からの回答を求めている反語文本来の性質を有することを明らかにした。

肯否疑問文形式の反語文は、文末に反語の文字マーカーを持たない無標の反語文もあり、そういったものを研究の対象に含めると、用例の網羅的収集が難しくなるため、文末が「か」「かい」となる例のみを収集した。肯否疑問文形式の反語文を疑問文と区別する要因として、基本的に下降イントネーションで発話されること、否定的語句がある

こと、非主題化していること、先行発話の当該発話に対する妥当性が低いことを挙げた。構文レベルの考察では、反語文が非主題化する要因は次の3点であることを明らかにした。①主格成分は反語文のコトのスコープに入る。②否定は肯定に依存しなければ存在しない概念である。話し手の脳裏の題目化された否定の含意が、強調のために肯定文となって問いかけられるとき、排他の意味が働き、非主題化されて反語解釈がなされる。その結果、問いかけに対する回答として、否定文の含意が聞き手の脳裏に伝達されることになる。③文に違和感をもたせ、レトリカルな解釈を生じさせるよう、反語文の文脈内の「は」と「が」の用法が疑問文の用法とは異なるようになっている。

語用レベルの考察では、話し手と聞き手（読み手）それぞれの経験に基づく概念が共有認識されると、先行文脈からの発話の妥当性の高さが判断されやすくなるということが明らかになった。妥当性が低ければ、反語表現として理解される。

本研究は、従来日本語学の研究分野で本格的に着手されてこなかった反語表現を、構文的、意味的、談話的、語用的に体系的に分析した点に意義がある。また、反語表現は、非母語日本語学習者がよく目にする漫画や小説に、頻繁に出現している。反語表現について詳細に研究し、構文によるニュアンスの違いまで明らかにした点で、日本語教育に大いに貢献したと考えられる。

今後の課題は、「知るものか」と「知るか」の相違のように、上述三種類の反語表現の境を越えて、更に細かいニュアンスの差を明らかにしていくこと、また、他言語の反語表現を学び、日本語との対照研究を行うことである。

## 1 この論文の意義

本論文は現代日本語の反語表現について、国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』及び漫画、小説などの実例をもとに、その特徴を体系的に記述したものである。本論文では、従来日本語学の研究分野で、疑問文研究の一部として扱われることはあったが、本格的に着手されてこなかった反語表現を、構文、意味、談話、語用といった複数の観点から体系的に分析している。このアプローチ自体にオリジナリティがある。無論、アプローチのオリジナリティだけでなく、研究成果にも意義がある。大量の実例をもとに分析を行い、同じ文型をとる疑問表現と反語表現とが、いかなる要因によって反語解釈されるかを整理した。さらに、反語表現は強い否定を表すが、それ以外の「意図する動作主体の限定」「話し手の呆れ、戸惑いの感情の表出」などといった周辺の意味が生み出される要因についても説明がなされている。

近年の日本語を母語としない日本語学習者（以下、日本語学習者）は、漫画やアニメなどをよく目にするが、そういったジャンルのテキストにおいても反語表現は頻繁に用いられる。しかし、その産出やニュアンスの違いの理解は、日本語学習者にとって容易なものではない。そのような反語表現について、詳細な記述が行われ、構文によるニュアンスの違いなどが明らかにされたことは、日本語教育への貢献でもある。

## 2 この論文の概要

この論文は以下の7つの章から成っている。

- 第1章 研究の対象・目的・方法
- 第2章 先行研究と本研究の立場
- 第3章 反語文を疑問文と区別する要因
- 第4章 専用形式を用いた反語文
- 第5章 疑問語疑問文形式の反語文
- 第6章 肯否疑問文形式の反語文
- 第7章 結論

第1章から第2章にかけては、この研究で「反語」が指し示す言語事象の範囲を限定し、研究の目的と方法の大枠を示した上で、反語に関わる数少ない諸研究の到達点と問題点が把握されている。第3章では反語文と疑問文とを区別する要因が整理され、その知見のもと第4章から第6章では、各種の反語文の構文、意味、談話、語用的特長の記述がなされている。4章では疑問文との混同がない反語専用形式が、第5、6章では疑問文との混同が生じやすい疑問後疑問文、肯否疑問文が分析対象となっている。終章の第7章では、各論での分析結果が整理され、分析で得られた知見の日本語研究や日本語教育での有用性が主

張されるとともに、今後の研究課題が示されている。

### 3 この論文の評価

この論文の評価について、審査基準に基づいて以下に述べていく。

#### 1) 研究テーマが絞り込まれている。

先述の通り、この論文の研究対象は反語表現である。様々な反語表現について、疑問表現と反語表現との区別の仕方、反語表現として成立するための条件、各種反語表現の表現性を扱っているという点で、テーマは一貫している。反語表現という、コミュニケーション上、特定の表現態度を表出する表現に着目し、文法的に分析・記述を行っているところにテーマのオリジナリティと、言語教育への有用性があると評価されるものであった。

#### 2) 研究の方法論が明確である。

コーパスをはじめとする実例を基本として分析を行い、「反語専用形式」「疑問語疑問文形式」「肯否疑問文形式」といった反語のそれぞれの形態について、「構文、意味、談話、語用」上の特徴を記述することによって、網羅性と体系性を確保することを試みている。しかし、「構文、意味、談話、語用」的な観点や特長を、明確に線引きができないという困難な部分があった。もっともその不明確さは、本論文だけの問題ではなく、そもそも反語が、複合的な要因の絡み合う現象であることに起因しているところが多分にある。それを踏まえた上で、最大限の明確化を追求しようとする執筆者の研究態度は、評価できる。

#### 3) 先行研究についての調査が十分に行われ、その知見が踏まえられている。

先行研究についての調査は、主に第2章が中心となっている。反語表現に焦点を当てた先行研究は少ないが、疑問文研究を中心として、助詞の「は」についての研究など、関連分野の先行研究への目配りはなされている。反語表現そのものについての研究は多くないため、執筆者が議論に先鞭をつけたところが多い。それだけに本論文の議論を文法研究として位置づける必要もあるため、従来の研究の知見を生かそうとする姿勢は十分に見られる。

#### 4) 結論に至る議論の展開が十分な論拠に支えられ、かつ論理的である。

先述したように、この研究は反語表現の成立条件、意味的特長の記述を中心的な目的とする。その意味では、多くの現象の指摘や整理がなされているが、「なぜ」そのように整理されるかというメカニズムについて、論理的な議論が足りないと感じられるとこ

ろがある。しかし、この点は、「記述研究」としての論文全体の評価に影響するものではないし、現象を整理するための議論の展開・論理性については一定の水準に達している。

#### 5) 当該分野の学術研究の進展に貢献する、独創性を備えた内容である。

反語表現の使用は、強い否定を表すため、対人関係を良好に維持するためにはリスクな行為である。いっぽうで、日本語学習者の興味を引く、小説や漫画などには多く用いられるため、反語表現の理解や適切な用法の習得は、必要性が高いものである。にもかかわらず、これまで日本語教育学の世界では、反語表現が全くと言っていいほど扱われてこなかった。これは、文型、文法形式などの表現形態にまず注目し、その用法を分析することがこれまでの研究の主流だったことによると思われる。その点、反語というコミュニケーション上の特定の強い態度を表出する表現機能にまず注目し、それに関わる表現群を観察するという、本研究のスタンスは独創的であるうえに、コミュニケーションのための言語研究として進展する可能性を持つものであると言える。

## 4 審査委員会の結論

この論文には、多くの事例に基づいた分析、明確な分析の枠組みで現象を網羅的に捉えようとする意欲的な試みが多く見られる。分析の方法や、現象を形作るメカニズムの解明などの点において、今後の課題とされるべきところがあるが、3の5)で述べたように、本論文は研究の枠組み自体に新規性が強く、フロンティアとしての役割を十分に果たしていると評価することができる。以上から、本審査委員会は、全員一致で、この論文が3で記したように、人間社会システム科学研究科言語文化学専攻の博士論文審査基準をすべて満たし、博士学位の取得にふさわしいものであると結論づけた。